異世界にトリップして神様から貰ったチートなパワーでブイブイいわせる話

うんこマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界にトリップして神様から貰ったチートなパワーでブイブイいわせる話

【Ｎコード】
Ｎ５５６６ＢＡ

【作者名】
うんこマン

【あらすじ】
なんか異世界にトリップして神様からチートな力を貰ったからちょっとブイブイいわせてくれる

「んあー？」

負っけないのねーん。

と、言うわけではないのだが目が覚めたら見た事もない場所だった。

なんというか石造りの建物……みたいな？

夢にしては意識がはっきりとしてるしなんだかおかしいなぁ。

自分が寝ていたのはこれまた石でできた台座……みたいなもの？石作りのベッドかもしれないがそんな寝にくい物が存在するとは思えないしなぁ。

座り込んで周りを見渡す。電気もついていない部屋だが窓やドア……ってか壁に穴が開いてて今は日の出てる時間っぽく外から明かりが入ってくるために一応部屋の様子は見える。

四方を石に囲まれて床も天井も石でできた部屋で、出口は一つ。扉すらないので人が通るための穴ともいえるが。ある物といえば自分が寝ている台座が一つ。

そしてその上に座る自分。服装は寝る前の、というか普段から寝巻きにしてるぼろいTシャツと綿のズボン。そして裸足……寝て起きたら、みたいな感じか？

とりあえず外に出るか？裸足だけど。

そう思って台座から降りてみたら

『混乱されているかと思われますがよろしいでしょうか？』

「な、なに！？」

突然頭に声が響いてきた。耳から聞こえたと言うか、まじで頭に響く感じ。ビビッて周りを見渡すが相変わらず誰も居ないし窓（？）の外とか出口のほうとかも見るがやっぱり誰も居ない。

「な、なんだよ一体……」

『それを今から説明します。落ち着いて聞いて下さい』

その説明を聞くところによると

・頭に響いた声の正体はこの世界の神様
・「この世界」と言っているようにここは異世界
・この世界にいる大魔王はあまりにも強く、この世界の神をも超えてしまい誰にも倒せない
・神様は大魔王に立ち向かい世界に平和をもたらそうとする勇者となりえる者に加護や力を与えたが大魔王の配下すら倒せない
・ゆえに異世界の人間に最後の願いを託した

とか何とか。

あとこの部屋は神殿だってさ。一室しかないくせに神殿とかマジうける。

「いや～……無理くね？俺ぶっちゃけあんまりにもグダグダで親に勘当されても反省せずにその日暮らしの派遣で食いつなぐ不健康不健全なだけの４０代中年の夢もキボーもありゃしないオタよ？」

『はい、あなたの言葉の一部の意味はこの世界の神である私には分かりかねますが……呼んだのがあなたである事の説明をします。まず第一に異世界から『何か』を呼ぶためにはその『何か』に見合っ

た代償が必要なのです。ですが私にはもはやその代償を払う力が……』

そりゃ大魔王とやらに勝てないレベルらしいからなぁ。

「ふむ、力が無いから人間一人しか呼べなかったと。しかしそれにしても呼ぶ相手くらい選べばいいのでは？」

『いえ、だからあなたを選んだのです』

「はてな？」

『若い人間は駄目です。若者には無限の未来があり可能性があるのです。ゆえに若者を呼ぼうと思えばその未来に見合った無限の力を要求されるでしょう。そして年よりも駄目です。年寄りには未来こそありませんがそれまでの人生で積み重ねた実績があるのです。その重みに見合った力を用意することもまた不可能です』

「ふむふむ」

『その点あなたは未来も無くこれまで積み上げてきた徳も無い、あなたの世界から見て不要な人間と言うことで……』

「……生まれてきてすみません」

『いえ！そんなあなたが居てくれたからこそ呼び出すことが出来たのです！……まぁその条件に合った方はあなたの世界に何故か沢山居たのでその中から無造作に、と選んでしまったのですが』

「まぁ今のご時勢いらん人間なんて石を投げれば当たるくらい居るわなぁ。つってもさ。俺も言ったし神様も言う通り、俺ってクズ側に属する人間よ？そりゃモヒカンでヒャッハーするような度胸も無いから善良な小市民と言えるかも知れんが俺に神様も倒せない大魔王なんて倒せっこない」

『申し訳ありませんがあなた自身のお力には期待はしておりません……いえ、誰に対してもあらゆる希望も持ってはいないのです。仮にあなたの世界の最高の魂を持った人間を呼んでも素の力では大魔王はおろか、その配下の配下の配下の配下の奴隷のエサにすら勝て

るとは思えません』
「そんなに」
『ゆえに、あなたに私から力を……『想像した物事を全て実現する力』を与えました。どうにかこの力で……』
「なにそれ！？そんなチートな力もらえんの！？てかそれこそそんな力与える力があるならこの世界の人間に上げたら良かったんじゃね！？」
『良くありませんでした。この世界の人間は例えどれほど願っても……大魔王を倒す力を想像する力を持っていないのです。いえ、正直に申し上げます。あなたにさえ私はそんな力を期待していません……もはや最後の悪あがきに過ぎません。ふふっ、この惨めな神をお笑いください。それだけであなたの気が晴れるとも思えませんが……』
「……え～と、すいません。確認したいのですが『想像を実現する力』ってのは言葉通りと受け取って良いんですか？その、めちゃリアルに、物事を理解してようやく発動する力とかそんな難易度のある力なんでしょうか？」
『ちゃいます。そんな難しい力を与えても人間には使いこなせませんし。言葉通り『想像した物事を全て実現する力』です。ですが勇者がどれほど大きな炎や雷、最高の名剣といったものを想像しても大魔王を倒す刃となりえませんでした……』
「んーと、その『力』はもう俺の中に有ると思って？」
『はい。使い方もわかるはずです……いえ、その力をもって逃げてください。大魔王によって滅びを待つこの世界ですがその力があれば数年だけでも生きていけるでしょう。やはり、異世界の方に戦わせるなど……そのような他力本願な事は許される事では有りませんでした』

えらい腰の低い神様だが大魔王とやらに勝てない事でもう精神的

に追い詰められてるんだろうか？
しかし『想像を実現する力』なんて反則技を使って勝てないのは……この世界の人間がアホだからではないだろうか？
使い方が分かると言うことだし少しやってみるか。
「『力』の使い方……お、本当に分かる。早速やってみるか。俺は無敵……そう、何よりも強い！」
サ〇ヤ人や聖闘〇や北〇神拳伝承者やキン肉マ〇のように無敵のパワー！を持っている！
「おお、力が湧き上がる！すげえ！見ろやこの筋肉ゥ！カッチカチやぞぉ！！」
腹筋が割れた！ていうか服が内側から破れたし！マジすげえ！
『……変な力の使い方ですね。いえ、ですが本当に戦わないで良いのですよ？もう私は諦めていますから』
「いやいやいや。そんな悲観的にならんでもええやんねん。取り合えず服破けたし新しい服でも用意すっか」
筋肉あるから上半身裸でも問題ないし、何よりも無敵の屈強な肉体のお陰で多分寒さや厚さにも耐性出来てるだろうが普段から裸だと変態だよね！
「せっかくマッチョになったんだしピッチピチのシャツに革ジャン、革のブーツとか……鏡がないと傍から見た姿も分からないか。鏡でろー」
自分は無いところからも物質を作り出す力を持っている！と想像

したらマジで出来て笑える。まぁだからこそ服やら色々用意できるのだが……

「容姿がなぁ。あと背も低いし……身長１８５センチ以上！体重うっすら脂肪を残して１１５キロ以上！そして顔も自分の印象を残しつつちょいちょい弄って……ま、あんまり変えすぎても鏡見てビックリするしこんな所かな！」

『本当に……思いも付かない能力の使い方をしますね。異世界の人だから……でしょうか』

むしろこんな能力もらってこういう使い方しなかったこの世界の人たちにビックリだよ。

「さて……大魔王って奴は」

気、小宇宙、オーラ、あるいは魔力だとかそれ以外の何かがあるのかも知れないが力を感じる。

この世界と言って良いのか、あるいはこの星か……とりあえず索敵範囲で一番大きい力を感じるがそれが大魔王に違いない。たぶん。

『あの、まさか大魔王に挑もうとしているのですか！？止めるべきです！呼んでおいて今更ですが……無駄に死ぬだけです！』

「いや～、せっかく力を貰ったんだしその恩に報いたいですしね」

あと勝てそうだし。ぶっちゃけ今感じてる大魔王の気が戦闘自に今の１００万倍くらいになったとしても勝てるわ。そのくらいの力を自分の中に感じるし。

『止めなさい！あなたでは……いいえ、もはや大魔王は誰にも倒せ

ませんッ！』
「ううん、勝てるね。わたし、そういうのわかっちゃう」
『勝てねーよ！』
「んじゃ、いっちょやってみっか」

説明しても分かってくれそうにないしサクッと行こう。
額に人差し指と中指を当て、おそらく大魔王と思しき『気』に意識を集中して瞬間移動発動！

んで

「デカァァァイッ！！説明不要ッッッ！！！」

瞬間移動で大魔王（？）の目の前までやってきたけど、でかい。マジでかい。説明不要って言うかむしろ説明をしなきゃ駄目なレベルででかい。
お台場のガン〇ムって奴、見に行ってないけどひょっとしたらそのくらいのサイズがあるかもしれない。そんな感じ。

ここはどうやらまたしても石造りの建物だけど大魔王の城なんだろうか？
いかにも９０年代ＲＰＧのラスボスの居城って感じで謁見の間とかそんな感じの部屋だけどでかい。

大魔王は椅子に座ってるけど椅子もでかいし、床に轢かれてる絨毯も横幅でかいし毛が膝くらいまで立ってるし。
部屋のあちこちに立ってる柱もでかい。

光源はどうやら魔法っぽい光る玉が沢山浮いてて明るすぎず暗くならず、適度に照らしてくれているので部屋の様子が良く見える。
目の前に居る大魔王（仮）の姿も。

ジャイアントオーラでかく見えるだけじゃね？と疑いたくなるくらいのビッグサイズ。でもどうやらマジでかいらしい。
服装は上半身裸で筋肉ムッキムキ。ピチピチの黒いズボンに腰ミノみたいなアーマーと膝と膝下をカバーするアーマー、さらに頑丈そうなブーツを履いている。
髪の毛というよりも鬣というか、ライオンの鬣を何十倍にもしたような感じでブワ～ッと、もうブワ～～～ッ！と後ろや上に広がっている。
人相も怖い、ワシ鼻で眉毛が無くて目つきはすごく悪くて眉間に皺がよってて機嫌が悪そうな表情も相まって怖い。
きつく引き締められた口の端からは牙が露出しているし。
あと肌の色は黄色人種っぽい感じ。やや黒いかも知れんが黒人みたいな黒じゃない「やや褐色？」ってレベル。

体のサイズが仮に人間レベルだとしても怖い。牙が生えてなくて髪形がただのロン毛だとしても怖い。
そんな感じの印象。

そんな大魔王（？）を観察していると向こうから口を開いたが、何を言ってるのか分からない。
そういえば異世界だった。神様とは会話できてたけどむしろそれは神様の力だろう。
えーとまずは……世界が変わっても会話できる力！を、俺は持っている！

「オッス！オラ悟空。スマン嘘だ。えーと、言葉通じますか？オー

ケー？」
「ゴミが」
お、聞こえた。「ゴミが」って言ったね。
と、同時に一瞬体に大きな圧力を感じた。
「ほお」
感心したような大魔王（？）声。
どうやら大魔王（？）の攻撃らしい。いきなりかい。
「ゴミクズにしては頑丈だな」
「えーと、すみません。あなたは大魔王さまでよろしいでしょうか？」
もし違ってたら大変だしね。いきなり攻撃されたっぽいがこっちは突然やってきた不審者だしね。
「ふん、人間風情が大魔王たる俺に質問とは随分と不遜が目立つな。おい、このゴミを始末しろ」
大魔王で正解だったらしい。そして大魔王の言葉が終わりきる前からこの部屋の天井裏や柱の影、さらには外に待機してたと思われる沢山の小さな巨人（ピッチャーではない。大魔王に比べて小さいけど7～8メートルある巨人達、つまり小型巨人である）がわらわらやってきて火を吐いたり雷を撃ったり吹雪を吐いたり弓を撃ったり槍を投げてきたり。
「バーリア」

取り合えずバリアを張って無効化する。別に無くてもノーダメージである確信を持っているけど気分でなんとなく。

すると大魔王の部下の巨人達が「ば、ばかな！？」「こやつ人間か？」とか、ざわざわとビックリしている。

「役立たずどもめ。消えろ」

と、大魔王が指パッチンするとベチャッと部下達の体が潰れて床のシミになった。

自分もその重圧は感じたけどノーダメージである。

「ふん、不愉快な。この俺にわざわざこれ以上の労力を払わせる気か貴様？とっとと自害せんか」

自分が生き残っていることが気に食わないのか大魔王はそんな事を言うが

「いやいやいや。何で俺が自害せんとあかんの。てか今潰れた人らってあんたの子分かなんかだろ？何やってるのさ」

「ゴミ一つ処分できんゴミを処分しただけよ。ふむ、とはいえ床が汚れたか。おいゴミ。とっとと床を掃除して自害しろ。そうすれば俺の記憶から消してやる」

何だこのバカは。大魔王か。でもバカだろ。

「お前さ。何命令してんの？俺お前さんの部下じゃねーし聞くはずねーじゃん」

何よりも

「しかも自分より弱いやつの言うことだし」

ヘラヘラと笑いながら言ってやると大魔王は目を釣りあがらせて立ち上がった。

うへー怖ぇー。でかいでかいと思ってたが立ったらもっとでかいわ。

あー怖い。

それだけだが。

「貴様ぁ！」

そして怒りのままに、右手にパワーを集中させて思いっきり殴りつけてくるバカ。フワリと浮いて回避してやると浮いた自分に向かって左の拳を放ってくる。

それも避ける。次は右のパンチ。

避ける。

蹴り。

避ける。

パンチ。

避ける。

パンチパンチ蹴りパンチ蹴り蹴りパンチパンチパンチパンチ蹴りパンチ蹴りパンチ。

全部避ける。

当たる気がしない。

こっちはパンチや蹴りを撃ちやすいようにとバカの視線よりやや下辺りを基点にしてフワフワ浮いてやってるのにバカの攻撃は当たる気がしない。

「当たりさえすれば！当たりさえすれば……！」

ぜーはーぜーはーと肩で息をしながらバカが悔しがる。
どうやら当たれば勝てると思ってるらしい。
そこらへんもバカがバカたる所以か。

「当ててみろよ」
「なに？」

バカの視線よりやや下に体の位置を固定、そしてヒョイヒョイと手招きして攻撃を催促してやる。
完全に無防備な体勢で。

「ぎきッ……！貴様ぁ！」

顔を真っ赤にして額に血管浮かべながら怒りまくるバカ。すげーバカっぽい。

「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇいッッッ！！！！！」

渾身の力を振り絞り放ったその攻撃。
今までででももっとも力を集中させた右拳がぶち当たり

「ばかな……」

信じられないと言うような表情になるバカ。
バカはお前だ。

「そんなものか？星は壊せてもたった一人の人間は殺せないみたいだな」

ま、実際のところこのバカにそこまでの力が無いのは既に知っているんだけどね。あったら使ってるだろうし。

「あ、ありえない……なんだお前は」

ヨロヨロとへっぴり腰で後ずさるバカ。

「人間だよー。お前を倒しに来たんだよ」

「バカな！お前のような人間居てたまるか！！」

ですよねー。

バカにしては言うじゃん。

神様からのもらい物の力でブイブイ言わせてるからこんなだけど、素の人間だったら……ねぇ？

「ま、そこら辺は同感だね。お前を倒しに来たとは言ってもさ。なんか思ったより弱いしちょい脅して言うこと聞かせりゃ良いかな？って、話し合おうかと思ってたけど……」

「わ、わかった！良いだろう！お前の要求を受け入れてやる！今日からお前は俺の奴隷だ！さあ！俺の靴を舐め永遠の忠誠を誓うのだ！」

何言ってるのこの子。

「は？お前バカなの？アホなの？死ぬの？何が奴隷よ。そういう身分かっつーの」

「ぐくっ……わかった！世界を半分やろう！俺の右腕にしてやる！供に人間を滅ぼし世界を支配しようではないか！！」

なんでこのバカは前提として自分が上なんだぜ？なんか疲れてきた。

「あのさー、お前がバカなのは分かったんだよ。もうね。言ったよね？話し合おうかと「思ってた」けどって。過去形で」

「か、過去形？」

「そ。話し合いで解決しよう。そう思ってた時期が俺にもありました。って。でもさ、お前自分の仲間をゴミ扱いして殺すじゃん。さっきから弱いくせに態度でけーし。種族的に人間と敵対する理由があるかもだしそこら辺も話し合って、解決できたら良いかなーって思ったんだけど止めた。お前に関してだけは。お前潰すわ」

「ヒィッ！？」

さらに後ろに後ずさろうとして足を滑らせみっともなく尻餅をつくバカ。

ガチガチと歯を鳴らし脂汗を全身からダラダラ流し今にも泣き出しそうな表情をしている。

「自分の仲間にも優しくできない奴じゃなー。話し合いの余地もあるまい。さーてと」

「ま！待ってくれ！待ってください！」

手からビームでも出して一発で殺そうと思ったがそこでバカは土下座した。

「俺が悪かった！反省する！もう人間は殺さない！殺しません！部下も殺しません！」

額に床をこすり付けて懇願する大魔王。
その姿はさっきまでのバカのバカな態度は無い、ように見える。
「お前が殺さなくてもお前の配下が殺すんじゃねーの？」
「こ、殺させません！部下にも人間を殺さないように言います！来年にでも……いえっ！明日、やっ、今日から！今から急いで命令を飛ばしますから！」

ふむ。

「お前らが人間殺してるのって何でさ？飯のタネか？だったら人間殺さなくなったら部下死なね？お前もだけど」
「いえ！我々魔人族は元から食事は魔獣を食べて生きてますから！人間殺しはただの趣味で」
「趣味？」
「ひぃぃぃ！も、もう止めます！止めさせます！だから！何卒！何卒……！」

ガタガタ震えて平伏す大魔王を見ていて冷めた。
やれやれだぜ。

「じゃあ全世界のお前の部下に人間殺しを止めるように命令しろ。今すぐ出来るものなのか？」
「はっ！はい！今の状況をテレパシーで飛ばしますから！……ッ！」

うわっ！ビックリした！

大魔王がテレパシーで今の状況を全世界の部下の魔人族に飛ばし、その情報に対する部下達からの返事のテレパシーが飛び、さらにそ

れに対する返事のテレパシーを大魔王が飛ばしたが、それら全てが自分の頭の中にも入ってかなりビックリした。

「お、終わりました……これでもう部下は人間を殺さずに……それぞれの領地にこもるでしょう」

「みたいだね。結界も張って魔獣が外に出ないようにもしてくれるみたいだし。うん、生物として差が有りすぎて人類相手じゃちょっと交友とか結べそうにないし、まぁそれがベターかな。あとはお前もそれに倣って人間との国交を絶ってくれれば良いよ。」

「あ、ありがとうございます！！」

床に頭をめり込ませながら謝る大魔王。

その姿を見ればもう今更何も言うことはあるまい。

「じゃあな」

さてこれからどうしよう？そう思って大魔王に背を向け歩きながら思案

「死ねぇぇ！！」

していたら大魔王が後ろから襲い掛かってきた。

後ろを向いてたくらいでどうこうなる戦力差ではないのに。

大魔王の攻撃が素手ではなくが腰の後ろに隠し持っていた短剣であったとしても結果は変わらない。

その短剣が対象に殺意を持って向けられただけで刺さるまでも無く対象を呪い殺す、神の力を超えた最凶の兵器であっても。

「このバカ野郎」

んで

「はぁ」

何度目かも知れないため息をつく。

空は快晴。

周りは自然あふれる草原。

人間の生活圏じゃないんだろうけどそもそもこの世界の人間の生活圏はかなり狭かったみたいで、歩いて人間の居るところまで行こうとすると何日がかりどころか何ヶ月がかりの旅が必要な、言ってみれば未開の地だ。

もっとも、人間と会えない事がショックでため息を出しているわけではないのだが。

『あの……』

「なんですか？神様」

手ごろな岩に腰を掛けて一休みしていたら神様の声が頭に響いてきた。

そういえば神様との会話もそこそこに大魔王のところに飛んだんだっけ。

「いや、すみません神様。話の途中で居なくなっちゃって」

目に見えない神様が相手だから、意味があるかわからないか一応頭を下げる。

『その事は構いません……ただ、申し訳ない気持ちと感謝の気持ちしかありません』
「そうでしょうか？」
『はい。この世界では今まで何度も魔王を名乗る者が現れ徒に他の生命を弄び、世界を滅びの道へ向かわせていました。その度に人間の中から勇気ある者達が立ち上がり、私はその者たちに力を与え勇者となった者たちは元から持っていた勇気、そして私から受け取った僅かばかりの力により魔王を打ち破り世界に均衡を取り戻していました。
しかし平和は長く続かず、数百年もすれば再び魔王を名乗る者が現れ、その魔王を倒すために勇気あるものが立ち上がっていました。そうやってこの世界は多少なりとも平和な時間を持っていたのです。
しかし倒されるたびに魔王は力を増し、ついに私をも超えた力を持つ大魔王が現れうにいたったのです。もはやどうにもならず、大魔王は人類を滅ぼせばきっと己の配下をも滅ぼしていたでしょう。
もう誰にも止められないと思った滅びをあなたは止めてくれたのです。
本当に……私の感謝だけでは足りません』
「そうですか……」

神様から貰ったチートパワー『想像を実現する力』で無敵になった自分にとってはなんでもなかったが、あれでも大魔王は強かったようだ。
神様のすごい感謝の気持ちは言葉以上にテレパシーみたいな力で心に伝わってくるが

『大魔王を殺めた事を気にしているのですか？』
「はい。たぶん」
『あなたは……あれ以上の結果は得られなかったと思います。少なくとも私には。私は神として、元々この世界に生きる人間や魔人や

魔獣といった種族によって『えこひいき』していたわけではなく、世界の均衡を得るためだけに力を使っていました。
ですから時に人間の中から魔王が生まれ他の生物、あるいは自分の隣人さえも打ち滅ぼしていくときには勇気を持った魔人や魔獣に力を与える事もありました。
そうやって力を手に入れた勇者達は常に勇敢に魔王の恐怖と戦い、そして勝利して魔王を、そして魔王の配下を殺しました。
そうして敵を追い詰め、もはや戦いを死を苦しみを恐れるように追い込むのが普通でした。そうでなければ平和は得られないと思っていました。
ですがあなたは大魔王さえ救おうとしたではありませんか』
「でも結果的には殺してしまいました」
『見ているだけしか出来なかった私が言うことでは有りませんが、あれは仕方が無い事だと思いますよ？』
「それでもね……いや、そうなのかな」
『そうですとも』
「はぁー、もう悩むの止め！らしくねーわ！そもそも借り物の力でブイブイ言わせて調子こいただけのバカな俺がいっちょまえに悩む権利なんてねーって！」
『……』
「どうしました？」
『いえ、変わったものの考え方をするのですね本当に』
「はてな？」
『今まで私に力を与えられた勇者達はそのように与えられた力を『借り物』として区別することなく己の物としていましたから』
「えー。いや、でもまぁその人たちは勇気あってこそだし……いいのかな？わかんね」
『さいですか。まぁあなたの力もあなたの知恵から出た物ですし自分を卑下しないでくださいな』
「知恵っても……俺の世界じゃもっと想像力の有るやつも居たと思

うよ」
『随分とすごい世界ですね……で、あなたはこれからどうなさるのです？』
「しらん」
『たかし。いえ、あなたの事ですよ？』
「いやねー、この力があれば帰れるかなーって思って『俺はあらゆる異世界をわたれる能力を持つ！』って想像してみたけどこれはなんか上手くいかんのよ。だから帰ることは出来ないっぽい。それはいいんだがだったら何をするかと言えばやる事がなー」
『さいですか』
「さいです。ま、じっとしてても始まらないしね。時間をかけて世界中回って旅でもするかね」
『一人旅ですか？寂しい人ですね』
「いいじゃん別に」
『だって今まで魔王を倒した勇者達は種族や性別にかかわらず、自分の種族の異性を大量に独り占めしたりしてましたからね。あなたがそうしないのが以外と言うか新鮮と言うか』
「節操ねーな勇者！むしろさすが勇者と言うべきか……ま、一応俺も世界救った英雄だしその権利くらいあったりするのかね。やらんけど」
『そうなのですか。本当に色々と違うんですねぇ。今までの勇者は己の子孫を大量に作り、その力を受け継いだ子孫が奢り高ぶり魔王となり勇者によって滅び、再び勇者の子孫が魔王となりと繰り返してきましたが……これは一つの歴史の転換期かもしれませんね』

はてな？

「またれよ。神様、ひょっとして神様から与えられた力は遺伝するのですか？」
『そうですね、種類にもよりますし、子孫は勇者から劣化してしま

いますが』
「魔王はどんどん強くなっていってるって言ってましたっけ？」
『はい、そしてついに今代の大魔王は神である私をも超えてしまいました……恐ろしいことです』

あんたのせいじゃんッ！

気付いたら自分はすごい勢いで突っ込んでいた。
何やってんのこの人。いや神。
ビックリだよ。マジビックリ。

あんた勇者のアフターケアくらいしとけよ。
子孫にも力が遺伝するなら人よりも強い力を持つ者は人よりも強いモラルを持って己を律するようにと忠告するとかさ。
とりあえず小一時間説教してくれたわ。
途中、叫びすぎて喉も痛めたが「飲み水とのど飴を作り出す能力を持っている！」って想像して喉のケアも忘れない。
この能力ほんとチートね。

「わかりましたか？これからはホント、力を与えっぱなしじゃ無くて力を没収するなり受け継がれるなら忠告するなりしてよ」
『いやぁ……考えたことも有りませんでした。大変参考になります』
「さいですか」
『さいです。これからはあなたの意見を採用するのも良いかもしれませんね。もっともその必要はないと思いますが』
「なんでさ」
『あなたは子孫に伝えるのでしょう？人より優れた力を持つ者は己を律し、その力に溺れることなく隣人を愛し弱気を救い正義をなせと。だったらこれから先、魔王は現れないのでは？』

「わからんよそんなの。親の心子知らずとも言うしさ。俺みたいに」
『そうですかねー』
「そうですとも！大体さ、前提からして俺が子孫作って正しく導けるとかわからないじゃん？」
『ううん、するね。わたし、そういうのわかっちゃう』
「うるせえ！」

もうやだこの神さま。

んで

この世界、これから先ふたたび魔王を名乗る者が現れたかどうかは神様しか知らない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5566ba/

異世界にトリップして神様から貰ったチートなパワーでブイブイいわせる話

2012年1月15日04時55分発行